
ジュースを忘れずに

榊 海良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジューズを忘れずに

【Nコード】

N1898N

【作者名】

榊 海良

【あらすじ】

意地悪で、ドSな守護神がついてしまった大学生の墨村里那。でも相手は人間ではないー人間と守護神の恋物語です。

01＊最初のピンチ

大学の友達に誘われていった合コンで、皆はなんか仲良くなってるけど私は特に誰とも仲良くなることは無かった。　まず興味が無い。
「ねえ、里那はいい人見つけた??」
妙に浮かれた顔した友人が私に問いかけてくる。見て分かるだろうに。

「いや。　まったく。　興味があんなもないもんで。」

こんな調子で二時間の長い合コンは終わって、一人家路を急いだ。

「ああ、なんで合コンいったんだろ……。」

独り言をつぶやいていると、足に痛みを感じた。
慣れないヒールを履いていて、途中で足をくじってしまったようだ。
最悪……。

そう思っていると、後方から低い声が聞こえた。

「前。　ちゃんとみなよ。」

「はあ?　どういうこ……」

前を見たときにはもう遅かった。　――大型トラックが私の歩く歩道に突っ込んで来たのであった。
もう、私死んじゃうのかな。

でも、痛みは無かった。　ただ、トラックがぶつかってガラスの割

れる大きな音などが響いているだけ。

——何故？

「——もう大丈夫だよ。目、開けな。」

さっきの声がまた聞こえた。あれ私生きてるの？

指示通りに目を開けた。

そこにはさっきの事故で破壊された廃墟の無残な姿と、へこんでしまったトラックの姿があった。

あと、綺麗な栗色の髪 of 青年が傍にいた。

「へ？　なんで、生きて……るの？私。」

「僕が助けたからに決まってるだろ。考えろちゃんと。前方確認をしなかったお前が悪い。——居眠り運転してた運転手はもつと悪いが、」

——プチッ　　はい。キレましたよ、私。

「ちよつとなによ。初対面なのに！！！！　そしてあんたは誰なの？」

今は午後１１時を過ぎているというのに大声を出してしまった。
うるせエな——といいながら青年は答えた。

「お前の守護神。名前はお前が決める。」

“守護神”？　ま、まさか。ファンタジーじゃないのよ。2010年よ？21世紀よ？日本だし……。

「文句言つならお前の母親に言え。お前の母親が寺で坊さんに『娘に安心な生活を送って欲しいんです。』なんていうから僕は守護神協会から派遣された。」

母さん…心配性なんだから…
はあ、、、

「でも、茶髪ってなんかチャライ。黒髪とかそんな感じだと思っ
てた。」

「しょうがねーだろ！生まれつき茶髪なんだ！！」

「僕は一応神なんで、消えたり出てきたりは気分しだいだ。でも主
の危険があつたときは必ず来る。以上。とにかくお前の家に連
れて行け。」

「でも、足くじいちゃったし。」

「肩かしてやつから、ゆっくり歩け。」

、、、優しいじゃん。

意地悪だと思ったのに…。

02*パイナップルジュース

―自宅

「おじゃましーす。お、結構いいじゃん。」

「まあね。あ、そこリビングだから入って。」

私が住んでいるアパートはお風呂もトイレも着いていて家賃もそこまで高くはない。五階建てで、三階に住んでいる。

普通の一人暮らしをしてるわけだ。彼氏も高校の時以来いないし・・。

「お礼になんか飲む？」

声をかけると、予想を超えた答えが返ってきた。

「パイナップルジュース。」

「は??なんつった?」

「パイナップルジュースだよ。あの超美味い奴。」

冷蔵庫には、お茶・牛乳・オレンジジュースしかなかった。丁度アパートの傍にコンビニがあることを思い出し、買出しに出かけた。

「あんたもついてくるの?」

「だって守護神だし。もしものために行く。」

いや違う。なんか私にパイナップルジュースたくさん買わせるつもりだ。でもまあいいか。

―コンビニ

『いらっしやいませー。大空マートへようこそ』

大空マート 日ヶ丘店 水色に白い雲の模様の看板がトレードマ

ーク。

ドリンク売り場へ行くと、結構フルーツジュースがたくさん売っていた。

「あんたの好きなジュースどれ？」

「これだな。果汁100%だぜ!!! これ凄く美味かった。」

本当にこいつ守護神か。目が子供並にキラキラしてるぞ、オイ。もはや、ただの人間じゃないか。

『お会計、10500円で御座います。』

はい。なんじゃコレ。

高すぎだろ!!!!!!

もはやジュース買うだけじゃねーだろ位の額だ。

ぴったり10500円出して、ジュースの入った袋を受け取る。

——重っ!!

小さい500mlのパックジュースを30本だもん♪

重いに決まってんじゃん……。

「ねえ。持ってよ。」

「ん？そんじゃあ、袋の紐を片方ずつ持てばいいんじゃない？」

そういつて半分ずつ持った。

「ねえねえ。こういうときってさ、男が率先して持つってのがさ普通じゃないの？」

「いや。僕は男女平等派だからさ。まあ、ラブラブみたいでいいんじゃない？ 里・那・♪」

初めて名前呼ばれた。しかもとびきりの笑顔で。

ラブラブって表現されたし、その笑顔はやバイノノノ

当然顔は真っ赤。 あんまり恋愛とかしないから、免疫が無い。

「ん？ 顔真っ赤だよ。」

見られた。 恥ずかしい。

何も言い返せない自分がいる。

「しょうがないな。 僕のジュース半分分けてあげるよ。 お家帰ったら。」

「うん。 ありがとう。」

02*パイナップルジュース（後書き）

主人公がツンデレになりつつあります。

パイナップルジュース買い過ぎ↑

03*名前(前書き)

やっと本編で主人公のフルネームできました！
では、お楽しみください^^

03*名前

あの騒動から早三日――

トラックの運転手は重症で、ケガ人は彼以外はでていないそう。被害にあったのは、トラックと築三十年を越すボロボロの廃墟だけだったそうだ。

近所の人は「女の人巻き込まれそうになったけど、ぎりぎり大丈夫だった。」

と証言している。

その女の人って私、スミムラリナ墨村里那なんですけどね。

私は学校を事故の翌日だけ休み、その後は普通に講義を受けた。友人には「風邪引いた」と言い訳をした。

その大学生活二年目にいつもと違う異変が起こった。

――アイツだ。

『おー、案外人いっぱいだな。結構有名な大学に通ってたのか、里那。』

「・・・そうね。　　ってか、あんた覚えてないんだからちょっと黙ってて。」

『えー！！　いいじゃん。独り言をいつてるお馬鹿な女子大生・・・みたいなの？？』

「・・・」

守護神のアイツは、大学では姿を消して一緒についてきてる。声も他の皆には聞こえない。

だけど、私だけ見えるように、聞こえるようになってる。

でも、コレだけは許さない。

「お願い！！　一応私女だからトイレだけはついてこないで！！！」

『えー。でも僕守護神だし。。。』
「おい。帰ったら殴るぞ、そんなことしたら。」
『すんませーん。待ってまーす。』

―講義も終わり、家路を急ぐ。

帰るときは、人気の無いところで姿を現す。

「なあ、そろそろ僕の名前決めてくんない？」

「あ、忘れてた。でもさ守護神の世界ではなんて呼ばれてたのさ。」

「・・・たしか、『A - 0324』だった。」

コードネーム的な感じだな。

「その数字は誕生日？」

そうたずねると、嬉しそうな顔して答えた。 なんか可愛い。

「正解！！　里那は馬鹿だけど、勘が鋭いな。」

それ・・・誉め言葉か？

ごっちゃになつててわかんねーな。

でも結構嬉しいカモ。。

「んじゃ、鞠^{マリ}は？平安時代みたいなの」

「やだ。」

「そんじゃあ、想^{ソウ}は？あの妄想の想。」

「やだ。僕妄想なんかしないし。」

「えー。何にすればいいの？」

あ。 とアイツが呟いた。

「夕日。綺麗だな……。」

「ほんとだ！！ 気づかなかった！！」

「だから周りに注意を払わないからこの前みたいな事故に遭うんだぜ。」

「これから気をつけますからあー！！ねえ、あんたの髪がオレンジ色に見えるよー。凄く綺麗！」

「まじで！」

自然と笑みがこぼれる。

こんなこと初めてかもしれない。

あ……。

すると、……。いい名前が思いついた。

この綺麗な夕日を忘れないように……。。

「あんたは今日から、『夕陽』よ！！ 忘れて欲しくないの！！こんなに綺麗な夕日みたの初めてだったし……。あんたの髪が光りに当って同じオレンジ色に輝いてるから！」

長いセリフを一気に喋ったから聞こえなかったかなあ。。。
すると、きゅっと私の右手を握った。

「・・・それにする。　僕の名前はこれから夕陽。　もう数字だけの名前じゃないんだな・・・！」

「・・・そうだよ！」

「キャー」　夕陽のやつ、照れてる。
可愛いなッ

季節はもう秋。

オレンジの空と同じ名前の意地悪守護神と普通の大学生の恋がここから始まるのです。

「なあ、里那。」
「ん？と聞き返してみた。」

「ありがと。」

04＊生活の変化

「ゆうひいー、お腹すいた。」

「意味分かんねー、女のお前がつくれ。僕はもっぱらごめんだね。だって一週間連続で僕だけだ。」

はい。やはりドS心丸出しの守護神夕陽との生活は大変です。

まず、ご飯問題。

私は料理があまり好きではない。

だからたまにしか自分で調理しない。

いつもはハルカゼというスーパーマーケットで惣菜を購入して、家で炊いた米で済ましてしまう。

でも、ご飯は必ず炊けと母い言われてきたものでそれがいつもの日課になっている。

だが、二人暮らしになってからは夕陽がここんところ作ってくれてるけど、そろそろするかなあ。。。

「僕が手伝ってあげるから、里那が基本的つくって。」

うつ・・・なんという優しs（ry

夕陽はツンデレだッ 絶対！！

「ありがと！！！！」

人間じゃない夕陽も何故かちゃんと食べる。
理由を尋ねると「僕たち守護神は半分人間だから栄養も必要」と言われた。

「生姜焼きにしようか。」

「ダメ。」

「え?????」

はい、恒例の拒否攻撃きたよ、また。。

「僕生姜食べれない。塚、嫌い。」

「えゝ じゃあ、焼き魚とか？」

「嫌。」

「ピラフ!!」

「嫌。」

「オムライス!!!!!!!!!!!!!!」

「嫌。」

このやりとりがあと何回か続いて、やっと決まった。

「ちらし寿司ねえ・・・・・・・・。子供の時いらい食べてない。」
「pcで調べたら?。」

そか。

忘れてた〜

ネットでちらし寿司の料理の仕方を見て、材料買いに行つて、やつと作り始めた。

只今、午後8時過ぎ。

「うおっし! つくるか!!!」

珍しくテンションが高い夕陽。

私は料理は苦手なので、あまり元気はない。

「そんじゃあ、里那はうす焼き卵。僕は酢飯作ってるから。」

「うへえ・・・、苦手だ。」

「すべこべ言わずに早く作れ。じゃないと、手伝わないよ」

「すいません。作ります。」

次は寢床問題。

一応、私とは別室で休んでもらっている。

あ、私こんなだけど女だから

夜中は天界へ戻って、守護神のなかでのえらい人に報告に行くらしい。

仕事だからなあ・・・ 夕陽は。。

次は衣服問題。

ご飯を食べて、早めに就寝した。

翌日、大学も休みだったからショッピングセンターへ出かけた。

「せっかくだから服買っただけで、どうする？」

「僕が今まで着てる奴は、基本的に常に清潔ではあるけど、たまには新しいのもほしいってのが願望。」

今まで夕陽が着ていた服は紫の半そでパーカーに黒の長そでTシャツ。金色に輝くペンダントをしていて、ジーンズを穿いてる。

すると夕陽が半笑いでこう言ってきた。

「でも金少ないんでしょ？ まあ所詮学生だしな、君。」

「……そんなこというなら買わないわよ。」

事実だけど、まあ二、三着程度は買えるくらいが今日の所持金だ。

「あ！ あそこ古着屋だから安いんじゃない？ 里那。」

指差したのは、全国チェーンの有名な古着屋。 今日もお客さんであふれている。

ショッピングセンターの中にテナントで昨年入ったばかりだ。結構おしゃれで、品質もいいし、なにより安いのがいい！

ちなみに今日着てきた服もそこで買った。

「そんじゃあ、そこで買うからね。適当にトップスとボトムス一着ずつ買ってあげるから。」

『いらつしゃいませ！』

店員のお仕事スマイル。

嘘くさい。

「じゃあコレとコレにする。」

10分程度で夕陽が選んだのは、スキニージーンズと緑の七分袖パーカーの半そでTシャツのセットだった。

『お会計、4780円になります。』

安かった。これからもここで服買おう。

お金を払って、品物を受け取り、店を出る。

「夕陽、明日それ着てね。せっかく買ったんだから。」

「はいはい。」

「ねえ、あれ里那じゃない？」

「ほんとだ。あれ彼氏かな？」

「え、でも彼氏いないって言ってたじゃん。」

「そんじゃあ、伊橋^{イバシ}に報告しなきゃね。」

「うんうん。写真も撮っとくか。」

「墨村里那、彼氏とショッピングデート。」

「・・・メール送信したよ。裕美。」

「ありがと。汐歌。」

04＊生活の変化（後書き）

最後の謎の二人組とは！！！！！！！！！！

なにやら怪しい二人ですなあw

夕陽と里那がラブラブにしか見えなくなってきた……;;;

05＊伊橋の表と裏

翌日。

いつも通り大学へ向かう。

自宅からは電車で行く。 夕陽はさすがに電車は嫌いなので、ついでこない。

でも大学につくとなぜかいる。

これが守護神ってやつなのかな・・・。

『よオ！！！！ 通学お疲れ』

「はいはい。」

すると伊橋がこちらに向かって歩いてきた。

「おはよ、墨村さん。」

笑顔が眩しい・・・！！

なんだこのスマイルは！！！！！！

こいつは、伊橋イバシリユウト 琉都。 ちなみに私と同じ教育学科の二年。

イケメンでモテモテ、優しくて、頼りになる。

だけどこれは表の顔。

裏の顔は、私もよく知らないが、最悪だと聞いている。

私は伊橋みたいなモテ男には興味がない。

そいつの凄いキラキラした笑顔とか向けられると一日が最悪になる

し……。

いかにもアピールしてるやつとか無理。

「・・・おはよ。伊橋、あたし今から講義あるから！！！」
「じゃあ。」
「そん

早歩きでその場から逃げる。 こういうときに講義があるのが幸
せ。

『おお。かつこいいじゃん、里那。』
「どうも。」

講義が終わり学食を食べていた時、裕美と汐歌が「隣いい？」とこ
つちにきた。

裕美が笑顔で話しかけてきた。

「ねえ、里那。彼氏できたあ？ウチは壽汰と相変わらずだよ」

「いるわけないじゃん。あたしモテないし・・・。」
「汐歌もこう続ける。」

「ふーん。でもさ、講義始まる前、伊橋に話しかけられてたじゃない。
い。」

「でも、あたし伊橋のことなんとも思っていないから」

「伊橋は絶対里那に興味もってるよ。付き合えばいいのに。」

「遠慮しとく。」

すると、汐歌のケータイが鳴った。

「メールだ。」

裕美と二人で画面を見ている。

その後ろにはなぜか夕陽が……。

『送信者：伊橋

タイトル：報告

本文：俺話しかけたらそっけなくされたし。

なんだよ、。。。

でも、俺のことお前らがアピれよ。

じゃないと、壽汰と雅己^{マキ}に

デマながして別れさせるからな。

あの写真の男より絶対俺のほうが

かっこいいし！

END

だって、里那。僕って便利だね。塚、もう伊橋とかいう奴に関わ
んないほうがいいんじゃない？

僕はそう思うけど。』

うわっ……

伊橋気持ち悪い。

塚、あの写真の男って??

もしや・・・古着屋に寄ったときに二人が撮ったの??

信じられない・・・。

まあ、まず夕陽が人のメールみて私に報告するって・・・。

普通はあり得ないはずだ。

「そんじゃあ、先行くね。じゃあ。」

どう言い残してさっさと学食を片付け、大学を離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1898n/>

ジュースを忘れずに

2010年10月10日21時52分発行